

開かれた大学

8

学生オーケストラ

別府アルゲリッチ音楽祭、「芸大シンフォニア」英国公演など
世界が注目する舞台での演奏機会が増える学生オーケストラの活動

海外へ地方へ、活躍の場が広がる

有賀誠門

このところ学生オーケストラの活躍が目覚ましい。何と云っても二〇〇一年、第三回別府アルゲリッチ音楽祭事務局から出演協力依頼を受け、参加したのが一因だと思われます。この音楽祭は国際的に認知されたものであり、参加できたことは大きな意義がありました。この音楽祭に第一回目から関係されている清水高師先生が、ぜひ芸大の学生たちに世界一流の芸術家と協演させたい、その体験こそが演奏家にとって何より大切な、という思いを提案されたことからはじまりました。

参加するにあたって賛否がありました。よく、東京芸術大学別府アルゲリッチ音楽祭特別オーケストラ」という名のもとに出演する方向に動きだしました。随行教官として、有賀誠門、杉木孝夫、永島義興、事務官二人が同行。現ロイヤルオペラ劇場音楽監督、A・パツパーノ氏の指導のもと、シベリウス作曲「交響曲第二番」のりハーサルがはじまる。またたく間に、音楽するレヴェルがあがり、若い学生諸君の能力が引き出され、本番は言葉ではいい表せない演奏となりました。辛辣な評をする斯界の方々から外交辞令でな

く、芸大学生オーケストラがよくやったと本音を聞き出すことができました。この音楽祭の総合プロデューサー、伊藤京子氏から、総監督M・アルゲリッチ女史が、ぜひまた一緒にしたい、と希望しているということから、第四回にも参加。アルゲリッチ、チェロのM・マイスキー、ヴァイオリンのD・シトコヴェツキー、指揮にC・デウトワでラヴェル作曲「ピアノ協奏曲」、「展覧会の絵」などを協演。二〇〇三年の第五回にも参加、事情でアルゲリッチの来日はなかったものの、代役として三日間、来日し大役をはたしたヒアニストのF・ブラレイ、ヴァイオリンのJ・ラクリン、チェロのM・マイスキー、指揮、A・パツパーノによるベートーヴェン作曲「三重協奏曲」は、はじめての組み合わせであり、一度と聴けない名演でした。しかも五周年記念を祝して東京公演がサントリーホール、芸大演奏堂の二か所で行われ、ベルリオズ作曲「幻想交響曲」は記憶に残る演奏でした。

今年、第六回にも出演依頼をいただき、パツパーノ指揮、マーラー作曲「交響曲第一番」などが



第5回別府アルゲリッチ音楽祭 東京公演 2003年5月10日・東京芸術大学演奏堂 ©産経新聞社

プログラムの一つとして提案されています。

この別府アルゲリッチ音楽祭のNHKテレビ放映をみて、ぜひ、芸大学生オーケストラの演奏をしてほしいと山形県長井市から出演依頼をいただき、昨年八月はじめ、小林研一郎指揮のもと公演を行いました。地元の方々の力強いサポートをいただき、成功させることが出来ました。今年もぜひ、という依頼がすでにきています。

特筆すべきことは、昨年三月下旬、音楽学部をあげて「芸大シンフォニア」が編成され、芸大創立以来初の海外公演が実施されたことです。時まさにアメリカ、イギリスによるイラク攻撃がはじまった歴史的な時でした。ロンドン王立音楽院大英博物館、ケンブリッジ、マンチェスター（北王立音楽院）の四公演が、指揮、D・シトコヴェツキー、マンチェスターでの合同演奏では佐藤功太郎氏が担当、ピアノは佐藤卓夫（当時音楽学部二年）、シヨスタコーヴィッチ作曲「ピアノ

協奏曲」、ブラームス作曲「交響曲第一番」を演奏。初の海外公演で芸大のすばらしさを外国の方々に知っていただくことができました。さらに海外へ芸大文化の発信が望まれます。

一九九八年から東京文化会館自主事業の一つ、「学生オーケストラの祭典」にも協力、五回にわたり、桐朋学園大学、東邦音楽大学、東京音楽大学、武蔵野音楽大学と協演、佐藤功太郎、田中良和、小林研一郎氏により東京芸大の潜在能力の高さを社会に知っていただくことができました。二〇〇三年「春の祭典」の名演は歴史に残ることでしょう。これも明治以来百余年にわたる前人諸氏の教育実績の賜物であり、常に、この地下水脈が枯れることのないように基礎教育基盤を徹底させ、より深く、高い音楽演奏を常に心がけることが、感性豊かにして元気な社会を創ることになります。東京芸大はその根幹を担っています。

（あが・まこと／音楽学部器楽科教授）



山形県長井市での公演。2003年8月



第5回別府アルゲリッチ音楽祭 別府・大分公演 2003年5月5日・ビーコンプラザフィルハーモニアホール（大分県別府市） ©産経新聞社